

編集後記

早稲田大学大学院教職研究科は2017年度をもって開設10周年を迎え、機関誌『大学院教職研究科紀要』の号数もまた十指を屈するにいたりしました。今号には「研究論文」3点、「実践研究論文」・「実践報告」各1点を、審査を経て掲載することができました。内2点が修了生による投稿であることは、発表や論文作成を通して自らの研究や実践を発信する力量の養成を重要視してきた一つの成果と考えることもできます。投稿者、審査・編集委員の方々にお礼申し上げます。▲10年の節目にあたり、全号の掲載篇数を指折り数えると、1号6篇、2号5篇、3号5篇、4号7篇、5号5篇、6号6篇、7号5篇、8号6篇、9号7篇、10号5篇の都合57篇となり、1号あたりの平均掲載篇数は5.7篇。執筆形態による内訳は、教員が関わる共著が15篇とおよそ4分の1を占め、単著は、修了生のものが4号の1篇を手始めに9号の3篇を最多として都合10篇あるのに対し、教員のは都合31篇で、1号あたりの平均は3.1篇。この数字を多いとみるか、少ないとみるか。専攻会議メンバー約30名の教員が執筆資格をもつ中で、「紀要」のフォーラムをさらに充実刷新するために積極的な寄稿が切望されてなりません。▲最新刊の『広辞苑』第7版を借りれば、「紀要」の項目には「大学・研究所などで刊行する、研究論文を収載した定期刊行物。」とあります。ただ、この漢語は「要を紀す」、すなわち要点や要訣を書き記すことがもともとのもので、『広辞苑』の冒頭には「(「紀」はすじみちを立ててしるす意)」と加えています。その「要を紀す」方法は、一定のものがあるわけではなく、学問分野による違いもあれば、各人各様の特徴もあってしかるべきです。わが『紀要』は修了生に執筆資格を開放している関係もあり、投稿者全員に審査を課していますが、その有無にかかわらず自ら書いた文章には自ら責任をもつのが当然のことでもあります。研究者教員と実務家教員とがそれぞれの立場から各様の論考を広く掲載することが重要で、「紀要」に芽生えるフォーラムを豊かに耕していくことが、相乗的に修了生の投稿を促すものとも思われます。▲2017年度には、教職大学院は2008年度当初の19大学院から、53大学院と倍増以上の多数となり、全国の都道府県に行きわたりました。その過密的な新環境の中で、教職大学院の質を担保しつつ、私学の立場から教職大学院を牽引していくことも肝要です。まさに「紀要」のフォーラムは充実するに如かず。新2018年度から誌名を『早稲田大学教職研究科紀要』に変更して新たなステージに立つに際して、誌面や編集のあり方について足もとを見つめ直すことも期待されます。

(十一コノ山山)